

道東における教育情報提供のための ウェブサイトとネットワーク構築の試み

佐々木 宰
(北海道教育大学釧路校)

鎌田 浩子
(北海道教育大学釧路校)

On the Development of a Website and Network for Educational Information in Eastern Hokkaido

Tsukasa SASAKI and Hiroko KAMATA
(Hokkaido University of Education at Kushiro)

1. 道東の教育事情と教育情報

筆者は先に、道東の学校現場における教育情報のニーズに関する調査を実施し、その結果を報告した¹⁾。調査は、釧路・根室管内市町村の公立小学校及び中学校209校に、「道東の学校現場で求められる教育情報についてのアンケート」を送付して行われた。この調査における「教育情報」とは、学習指導や生徒指導、教材研究や研修、学級経営や学校経営など、学校での業務を遂行する上で必要とされる情報全般を指すものとしている。道東の教育現場において学校教員はどのような情報を必要としているのか、情報は充足しているのか、どのような手段によって情報を得ているのか、ということがらについて全体的な傾向を把握することが調査の目的であった。

調査結果を概観すると、道東における教育情報の充足度は、全体としてやや不足気味ではあるが、ある程度満たされている状態と判断できた。ただし、地域的な格差も大きく、釧路管内よりも根室管内の方が充足度は低い傾向にあった。

求められている教育情報の内容は、学習指導に関する情報が中心であり、特に「少人数・複式指導に関する情報」に対する要求度は、釧路・根室両管内ともに突出したものであった。少人数・複式指導に対応した学習指導は、へき地・小規模校が多数設置されている釧路・根室地域にとって重要な課題である。このように道東において求められている教育情報の傾向には、へき地・小規模校という地域的な実情が如実に反映されている。

少人数・複式指導への対応は道東の学校にとって恒常的な課題であり、この課題がなくなることは予想できない。しかも、その対応は、それぞれの学校や、学校が置

かれている地域の実情、子どもの実態に即した個別的なものである。一般的な教育情報ならば、その情報源も多く入手も容易だが、道東の地域的な教育事情を踏まえた教育情報となると、量的にも充分とはいえず入手も困難であろう。アンケートの自由記述回答にみられた、「へき地、複式学級の経験が不足している教員のために、授業の仕方や、カリキュラムの組み方などの具体的な資料が欲しい。学年別指導を進めていくための手だてが欲しい。インターネット、書籍でも、このような情報がなかなか手に入りません。学校の中でインターネットが自由に使えても、情報そのものが不足しています。²⁾」という指摘は、道東における教育情報の現状を端的に表している。

他方、教育情報を入手する手段に関する回答結果から判明した特徴は、図書・書籍に次いでインターネットが情報入手の手段として利用されている事実であった。インターネット上のウェブサイトから必要な教育情報を検索し入手することは、学校内外の研究会や研修会による情報の入手よりも、より簡便で日常的になっているようである。教育現場におけるインターネット利用が教育情報を入手する手段としてきわめて高く評価される背景には、その簡便性だけでなく、道東の学校が置かれた環境的な要因もある。近隣に書店や図書館、社会教育施設がなかったり、遠く離れているために利用が困難だったりする地域では、物理的な距離の問題から解放されるインターネットは有効な情報収集の手段となる。

インターネット上の教育情報に関するウェブサイトは、公設・私設含めて多数開設され、有益で利用価値の高い情報が公開されている。その反面、膨大な教育情報の中から必要なものを選択することは容易ではない。へ

き地や複式，少人数教育に関する具体的な情報，地域に特化した情報は，前述の指摘のように情報そのものが少ない。インターネット上には多くの教育情報が公開されているが，地域の実情を伝える教育情報は，当事者かその関係機関が発信しなければ提供されない。アンケート調査の結果をみると，教育情報を得るための手段としてインターネットを評価する一方で，情報を提供する立場でこれを利用する場面は多いとはいえないようである。

さて，行政からの教育情報の発信としては，北海道教育委員会や，市町村教育委員会による教育の情報化や教育情報の共有化の試みがあげられる。北海道立教育研究所附属情報処理センターでは「北海道教育情報通信ネットワーク」ウェブサイトや，附属情報処理センターのウェブサイトを通して，教育情報の提供を行っている³⁾。道立理科教育センターや道立特殊教育センターもウェブサイトにおいてそれぞれの教育情報を提供している⁴⁾。道東釧路市では，釧路教育センターが事業の一環としてウェブサイトを公開し，各種情報の提供を行っている⁵⁾。行政による教育情報の提供は，担当部署によって対象とする教育情報が異なったり，目的が異なったりしているために，必ずしも利用者にとってわかりやすいものになっているとはいえない。また，提供される情報の継続的な更新も容易ではないようである。これは，一定地域の教育に関する情報を網羅的に収集，提供することの難しさを示しているといえよう。

一方，各種研究団体，教育関係者，教員個人など，私的な立場での教育情報の発信件数も多い。校種，教科や専門分野等に特化した情報を提供しやすく，情報を受けとった者からのフィードバックも得やすいであろうと推測できる。しかし，例えば複式・少人数教育に関する情報を発信する団体，関係者，個人の数は多くはないし，しかも特定の地域におけるへき地教育に関する情報となるとさらに情報の発信者・提供者は少なくなる。

つまり，へき地ではインターネットからの教育情報の入手が期待されながらも，情報を提供する主体が少なく，ネット上の情報量も相対的に低いという状況にある。行政等の公的な組織が，教育現場からの情報を収集してこれを提供することが望まれるが，現状ではそれを実現するまでに多くの困難が予想される。道東の学校や教員は，へき地・少人数教育に関するノウハウや実践情報を提供してくる貴重な存在であると同時に，その情報を必要としている主体でもある。この二つの立場に介在して地域の教育情報の共有化と，教育情報の地域化をはかる機関や組織が求められているといえる。

2. ウェブサイトにおける教育情報提供の構想

道東地域における教育情報の共有化の課題を踏まえ，ウェブサイトを紹介した地域の教育情報提供のための実験を構想した。筆者らは，従前から，道東に勤務する本学卒業生と共同研究を行い，造形教育，総合学習などの教材開発に取り組んできた。佐々木は，亀岡（根室市立歯舞中学校）とともに，大漁旗制作を取り上げ，漁業地域における地域教材研究を行った⁶⁾。鎌田は，別海町立美原小学校の実践例をとりあげ，学校教育における「生活」の視点から総合学習としての性格を導いている⁷⁾。このようなへき地・小規模校での教材研究や協力関係を通して得られた教育情報を公開し，教育リソースとして活用するためのメディアとしてウェブサイトに着目し，サイト構築に向けての準備作業を開始した。

まず，モデルとなるウェブサイトを検索し，教育情報の内容や種類，公開の方法などを確認した。前述のように，教育情報を公開するウェブサイトは公的なものから私的なものまで多数ある。公開されている情報が誰に対してどのように役立っているかを評価することは難しいため，モデルとして参考になるものの特徴を把握することに努めた。

教育情報に関するウェブサイトで国内最大規模のものは，教育情報ナショナルセンター（略称 NICER）のウェブサイトであろう⁸⁾。同センターは，国立教育政策研究所の事業として展開されており，国内の様々な教育情報の収集と整理・体系化を行っている。扱う情報の範囲，想定している利用者，情報の体系化という点において国内の教育情報の拠点といえる。提供される情報には，情報の内容を示すメタデータが付加されており，これによって膨大なデータの整理・検索の利便性を向上させている。

地方公共団体教育委員会の運営するものとして，沖縄県教育委員会の IT 教育センターが運営する「IT 教育総合案内サイト」は，情報の内容や構成など非常に優れたものになっている⁹⁾。同センターによる「教育情報共有システム」は教育素材，研究報告，イベント情報，学習教材，教材作成支援ソフト，指導案等，琉球文化などの教育情報を検索・入手できるシステムになっている。へき地・小規模校が多いため，複式授業や少人数指導に関する情報も，同システムを通じて多数検索することができる。扱われる教育情報は，県内の教育の実情を反映したものであるため，具体的で教育現場に即したものが多く含まれている。

行政による公的サイトとは別に，学校や教育研究団体，教員個人が自主的に運営しているウェブサイトの中にも参考になる事例が多くある。熊本県図画工作・美術教育研究会の西尾隆一氏を中心に運営されている「Web こ

ども美術館」は、教員の個人的な取り組みから始まったものが、研究団体の公式サイトを経て、県教育センターのサーバーからの発信となり、さらに文部科学省委託・教育情報共有化促進モデル事業に指定され現在に至っている。このウェブサイトでは県内・海外の児童生徒作品や実践事例が公開されている。なお、全国規模での実践事例の共有を目指した「Web こども美術科・別館」も公開されている¹⁰⁾。また、学校教員が個人で運営するものとして、北海道の中学校教諭山崎正明氏によるウェブサイト「豊かな美術教育を!」、ウェブログサイト「美術と自然と教育と」は注目に値する。前者のウェブサイトでは、自身の教育実践に関わる情報を中心に公開し、後者のウェブログサイトでは全国の美術教育関係者との情報交換と交流を図っている。教育情報のデータベースとは異なり、個人的な発想や実体験が生かされている¹¹⁾。

いくつかのモデルを概観すると、教育委員会や教育センターなどの行政による教育の情報化には、それぞれが所管する地域や分野における教育情報のデータベース化という発想があることがわかる。教育委員会と学校の間には、教育情報を収集しやすい組織構造があるので、網羅的に集めた情報をデータベース化できる。他方、団体や個人の場合は、公的な制約から離れたところで、それぞれの実践や教育に関するアイデアの発信ができる。それぞれが提供できる情報は限定的だが、それだけに専門的な内容が期待できる。ただし、提供する情報は、発信者自身が作らなければならない。

教育情報の提供を目的としたウェブサイト運営の難しさは、公開する内容をどのように生み出すかということである。さらに内容を追加して更新し続けることの難しさがある。前述したように、学校現場が、地域に特化した教育情報を求めたり、情報の交流を求めたりしながらも、自ら情報の発信をするには至っていない現状がある。日々の実践の中から、提供すべき内容をさがし、それを加工してウェブ上で公開する過程では多くの労力を要する。へき地・小規模校で個々の先生や学校が情報発信することによって情報量は増すが、現実には多くの困難がある。

へき地における学校現場は、へき地教育の教育情報の発生源であり、同時にその情報を求める主体でもある。したがって、学校における教育情報を収集し、ウェブサイトのコンテンツとして加工して公開するためには、学校現場との人的なネットワークも必要となる。今回の試みでは、学校現場に教員として勤務する本学釧路校の卒業生との連携をはかり、現場情報を提供してもらうこととした。現場に勤務する卒業生を一次資料の提供者として位置づけ、大学ではそれをウェブサイトのコンテンツとなるように加工して公開し、ウェブサイトを通して現場に還元提供するという循環を構想した。卒業生との連

携をもとにしたネットワークは、特別な契約事項をもたないゆるやかな協力体制によるものとした。

3. ウェブサイトの構築と内容の整備

試験用ウェブサイトの名称を「北海道教育大学釧路校美術教育研究室 ARTEDU@HUEK」として、釧路校ウェブサーバ上で2005年5月より公開することとした¹²⁾。

ウェブページの作成については、市販のHTMLエディタを用いた。データの作成・加工を大学で行い、順次釧路校ウェブサーバにアップロードしていった。

このウェブサイトの趣旨は、図工・美術教育に関する情報を提供すること、釧路校美術教育研究室の学生及び卒業生の活動を紹介することにある。むろん、最終的な目標は卒業生との人的ネットワークと、現場からの教育情報の収集、大学での加工、現場への提供というサイクルを構築することにある。5月からの試験運用にあたっては、①卒業生との連携を保ち、現場からの資料を一定程度得られるか、②資料の加工とウェブデータ化にどの程度の労力を要するか、③大学での授業、研究成果、学生たちの活動成果を現場に提供できるか、④現場(卒業生、教員)と在学生の接点となるような話題提供ができるか、⑤地域の社会教育施設(美術館、芸術館等)との連携も視野にいたれた情報提供ができるか、⑥日常的な業務の中でどの程度の頻度で内容更新ができるか、の6点について、実際の運用を通して確認することとした。

ウェブサイトが提供する内容を、「図工・美術教育の情報」「美術教育研究室の情報」「管理人のノート・メモ」に大別した。現場への情報発信は主に「図工・美術教育の情報」に集約した(表1、図1参照)。次章以降、「図工・美術教育の情報」の内容の詳細を見ることとする。

4. 「教材例・実践例」のページ

「図工・美術教育の情報」では、教育現場に対する情報の発信を目的としている。ここではさらに、内容を「教材例・実践例」、「情報とアイデア」、「お知らせと宣伝」、「資料」の4つに分けた。なかでも、「教材例・実践例」については、ウェブサイトの内容的な核として位置づけ、卒業生の実践例を紹介した。(図2参照)。

全校生徒8名の小規模校に赴任した卒業生は、図工の実践をデジタルカメラで記録して、年間指導計画等とともに資料を提供してくれた。この小学校では、少人数のために図画工作では全学年の児童による合同学習が行われており、異なる発達段階の子どもたちに対する表現指導の実践例を公開することができた。ウェブサイト上では、実践例の紹介という形式をとりながらも、子どもの

表1 ウェブサイトの構成

●図工・美術教育の情報	
教材例・実践例	<ul style="list-style-type: none"> 卒業生による教育実践 卒業生による研究授業記録，指導案資料ほか 卒業生による教材研究，開発教材
情報とアイデア	<ul style="list-style-type: none"> 附属研究会・研究授業資料，指導案ほか 作家によるワークショップの記録 道内の教育研究会取材記録，研究授業資料 10年経験者研修の記録，配付資料ほか
お知らせと宣伝	<ul style="list-style-type: none"> 展覧会等各種イベント開催情報 出版物等の紹介
資料	<ul style="list-style-type: none"> 図工・美術実践のための各種情報 指導案データ 卒業研究発表概要資料 卒業生による図工指導資料データ 美術教育関連論文データ
●美術教育研究室の情報	
活動風景や授業風景	<ul style="list-style-type: none"> 授業の記録 教育実習の記録（指導案・写真など） 卒業研究発表会，展覧会活動等の記録
釧路芸術館とのコラボ	<ul style="list-style-type: none"> 釧路芸術館におけるボランティア活動 釧路芸術館における展覧会活動
●管理人のノート・メモ	
ツレツレ日記	<ul style="list-style-type: none"> 日々の雑感
アルバム・らくがき帖	<ul style="list-style-type: none"> 大学内外の写真
PROJECT	<ul style="list-style-type: none"> 研究ノート（制限つき公開）

表現の特徴や指導のあり方についてのコメントを付した。図3は粘土による立体表現活動の実践例，図4は運動会の応援旗づくりの実践例である。

また，中学校に美術教員として勤務する卒業生が行った全道規模の研究大会での公開研究授業を取材し，写真や学習指導案，関連資料とともにウェブサイト上で紹介した（図5参照）。この研究大会は，北海道造形教育連盟が毎年開催する研究大会であり，平成17年度は函館市で行われた。卒業生の勤務する中学校は，へき地校ではないが，比較的少人数の函館郊外の学校である。研究授業で取り上げた題材は，学校近隣から掘り出した粘土を使った土器制作である。放課後や休日を利用して生徒たちと粘土を採掘して精製したり，成形した作品を焼成するために野焼きを行ったりしながら，長期間にわたって進めてきた実践であった。公開研究授業では，焼き上がった生徒作品（粘土で作った燭台）に口ウソクを灯しての鑑賞活動が行われた。

このような地域の素材を生かした造形活動の教材研究や授業実践の記録は，道東のへき地・小規模校が参考にすることができる貴重な資料になる。授業をした卒業生自身も，教材研究や授業計画の際に，粘土や野焼きに関する参考資料がなくて非常に苦慮したと語っている。文献等で得られた知識と，実践を進める過程で得られたノウハウは，広く共有されるべき貴重な教育情報である。ウェブサイトでは，公開研究授業の授業風景や完成した生徒作品の写真を中心に実践を紹介するとともに，指導案と関連資料をPDFファイル化して，ダウンロードできるようにした。

中学校に勤務する卒業生の教育実践の紹介はこのほか，根室市の漁業地域の学校で行われた大漁旗制作の実践などがある¹³⁾。

この他の教材例・実践例としては，学生が卒業研究として取り組んで作成した鑑賞用ウェブ教材がある（図6参照）。これはウェブページ上で閲覧することを前提にして作成された，鑑賞のためのアニメーションである。画面上のボタンを操作して，アニメーション画像を再生させ，ピカソの鑑賞のための知識を学んでいくというものである。

学生が作成した教材をウェブサイトで公開することで，教材のヒントを提供でき，現場からのフィードバックによって教材の改良が可能になる。ウェブ教材は，コンピュータの種類に依存せず，ウェブブラウザ上で再生することが可能なので，大学と教育現場の協力関係に基づく遠隔教育教材の開発への応用が期待される。

5. 「情報とアイデア」のページ

卒業生との連携だけでなく，造形作家，教育関係者，大学とその附属機関などの活動を伝えるための内容群とした。そのため，ほとんどの内容は，現場からの情報提供によるものではなく，現場に直接赴いて取材を行った結果をまとめ，ウェブ上で公開している。

「情報とアイデア」の内容群は，平成17年度附属小・中学校教育研究会の公開研究授業の記録，釧路市で行われた造形作家岡部昌生氏のワークショップの記録，前述の北海道造形教育研究会の取材記録，大学で行った10年経験者研修の記録などを含めた（図7参照）。

平成17年度の附属釧路学校の教育研究会は，小学校と中学校の連携を中心的なテーマに据えて小中合同で開催された。小学校では第1学年の図工，中学校では第3学年の美術が研究授業として公開され，義務教育9年間を通じた造形教育のあり方が分科会で問われた。公開授業の記録を写真等で紹介し，それぞれの授業の指導案をダウンロードできるようにした。また，近隣の小学校教員，中学校教員，高等学校教員，本学学生が参加した分科会での意見交換の様態を紹介した（図8参照）。附属学校の実践を写真や指導案等の資料を含めて詳細に紹介することで，大学及び附属，学校現場との人的なネットワークを拡大するねらいがある。

また，平成17年8月に大学で行われた10年経験者研修の記録を掲載した。図工・美術コースの研修を受講した11人の学校教員の講義，美術館・芸術館の見学，実技実習の風景を記録した。講義で使用したプリント及び資料等はPDFファイル化して，ダウンロードできるようにしている。研修のあり方，教材研究のあり方についての

筆者の意見等も掲載した。11人の受講者は、釧路・根室・十勝管内の小学校・中学校教員であり、研修が終了してからも連携が維持できるようにウェブサイトでの情報発信に努めている。研修後の受講者からの問い合わせは、現場で求められる教育情報を知る上での参考になり、ウェブサイトの内容に反映することができた。10年経験者研修の実施記録を公開することは、次年度以降の受講者に対して情報提供にもなっている。

6. 「資料」のページ

「資料」の内容群には、図工・美術実践のためのヒントや材料・用具・実技等の知識などを扱った「図工・美術実践のための TIPS」、美術教育研究室学生の卒業研究概要、公開研究授業や学生の立案した指導案、筆者の論文などが含まれる（図9参照）。

なかでも、「図工・美術実践のための TIPS」は、学校現場の教員との人的なつながりの中で明らかになってきた具体的な現場の声に基づきながら内容を追加・更新している。例えば、小学校で扱われる紙版画の道具とその扱い方、紙をはじめとする材料の知識、中学校美術で扱われる彫刻等と木彫教材などについては、実際の問い合わせがあり、その回答を兼ねたウェブページを制作して公開している。また、大学の授業で配布したプリントをPDFファイル化して公開し、材料や用具の基礎知識に関する情報を提供している（図10参照）。

例えば、「紙版画道具セット」のページでは、安価で扱いやすい版画道具セットの作り方と使い方に関するノウハウを写真とともに紹介している（図11参照）。

学校現場からの直接的な問い合わせは、材料・用具・技法についての事柄が多い。画材や特殊な用具、材料に触れる機会が少ないためである。そのためか、いわゆるキット教材が用いられることが多くなるようだが、わずかな知識と工夫次第で材料や用具を安価に揃えられる場合も多々ある。こうした情報を提供することで、地域素材を利用した教材開発が促されることが期待される。

さらに、公開研究授業などで入手した学習指導案、学生たちが教育実習時に立案した学習指導案など、徐々に蓄積される指導案をPDFファイル化して公開している（図12参照）。学校現場に対して公開するという意味合いもあるが、教育実習生として大学を離れる学生に対して、指導案の参考例を提供するという意味合いも強い。

この他にも、学校現場や学生にとって有益と思われる内容については、随時追加・更新した。

7. まとめと課題

平成16年度半ばから準備を進め、平成17年5月からウェブサイトを公開して、現段階で約1年が経過している。この間、情報の収集、取材、ウェブデータ制作、ウェブサイトの更新作業を継続してきたが、アクセス数や、内容に関しての反響など、ウェブサイトに対する客観的な評価は行っていない。しかし、平成17年5月からの試験運用にあたって設定した6つの確認事項については、現段階で以下のようにまとめることができる。

① 卒業生との連携維持、現場からの資料入手の可能性

卒業生との連携は、当初の予想よりも広範囲に、かつ継続的に進めることができた。特に、道東のへき地校に勤務する卒業生から得られる情報は、具体的でありながらへき地・小規模校全体に共通する内容を含んでいる。例えば、小規模校での合同授業による図画工作の教材研究やカリキュラム立案に関する教育情報は、へき地校では恒常的に必要とされながらも、これまで提供されることは少なかった。また、複式におけるカリキュラムや時間割の具体的な諸問題が、卒業生の体験を通して浮き彫りにされた。これらはへき地の教育に対して役割を担う本学の研究と教育に大きな示唆を与えるものである。

卒業生が提供する資料はデジタルカメラで撮影した画像データ、年間指導計画や時間割、学校要覧等であり、さらに口頭（面談）でのやり取りや電子メールを通して現場の詳細を知ることができた。

② 資料の加工とウェブデータ化に要する労力

学校現場から得られた資料をウェブデータにするためには加工が必要になる。文書資料はドキュメントスキャナによってPDFファイルにすることが容易である。デジタルカメラの画像データも、直接コンピュータに取り込むことができる。

ただし、本ウェブサイトは、データベースとは異なって、一件ごとにページを作成してまとめた内容としていわば雑誌の特集記事のように提示する形式のものがほとんどである。得られた資料をもとに、作成する内容を決め、写真画像の選択や修正を行い、一定の形式にまとめている作業は、雑誌や書籍の編集と同じである。この作業には多大な労力と時間を要するため、通常業務の中で頻繁に行うことは難しかった。複数人による分業や、少人数による組織的な取り組みによって労力の分散や時間の短縮が今後の課題である。

③ 授業、研究、学生の活動成果の現場への提供

大学における教科教育法、教科専門などの授業内容を、

そのまま現場に提供するためには複雑な作業を要する。そのためのウェブデータを改めて作成しなければならないからである。現状では、授業の配布用プリントのPDFファイル、授業において学生たちが考案した教材や立案した指導案などを公開している。ウェブデータ化をあらかじめ想定して、授業の資料の一部をウェブ形式で作成したが、外部への公開に馴染むものを作成することはできなかった。この点に関しては、e-Learningや遠隔教育を想定しながら研究を進める必要がある。

なお、研究論文についてはPDFファイル化してダウンロードできるようにしている。

④ 現場と学生の接点となる話題提供

「図工・美術教育の情報」の内容群では主として卒業生を中心とした現場からの情報に基づく内容を紹介し、「美術教育研究室の情報」の内容群では在学生の活動を紹介している。ウェブサイト全体としては、在学生から卒業生にいたる利用者を意識したものとなっている。現段階で、現場と学生を直接結びつけるような話題提供はできていないが、今後、各種研究会や学生たちの活動を通して現場との接触を試みる。

⑤ 地域の社会教育施設との連携を視野に入れた情報提供

北海道立釧路芸術館、釧路市立美術館との連携を強く意識し、とくに釧路芸術館における学生のボランティア活動、企画展示における学生の展示協力の経過を詳細に記録し、紹介した。平成17年7月から8月にかけて釧路芸術館で開催された企画展「ももちゃん芸術祭」には、美術研究室の学生が約2ヶ月間にわたる準備を経て展示協力をしており、その進行状況をウェブサイトで随時紹介した。ウェブサイトは学生たちが進行状況の確認のために利用したほか、芸術館スタッフも学生たちの作業進捗を把握するために利用した。展覧会後も、社会教育施設と連携した大学授業や学生の活動例の具体的な記録となった¹⁴⁾。社会教育施設との連携を意識した情報提供は可能であり、その効果は高い。

⑥ 日常的な業務の中で可能な内容更新の頻度

現場からの提供による情報を加工してコンテンツ化するには労力と時間を要する。試験運用以来、平均するとひと月に4～5件程度の部分的な内容更新を継続してきた。「図工・美術教育の情報」に関わる大きな内容は、ひと月に一件程度、「美術教育研究室の情報」に関わる微細な内容更新や、雑感を綴った日記の更新がひと月に4件程度である。現段階ではこれが限界であると判断した。

今回のウェブサイト開設は、道東地域における教育情報の提供手段としての可能性を試すことが一つの目的であった。そのために、卒業生との協力関係をもとに、学校現場からの情報の収集、大学での内容化、そしてウェブサイトによる情報の提供、というサイクルのモデルを構想した。

既存のウェブサイトの事例から、教育情報の提供には提供すべき内容収集とその整理・体系化に多大な労力を要することがわかった。網羅的なデータベース化は、労力やコストに見合うスケールメリットが見込めないと、その実現は難しいであろう。したがって、へき地・小規模校に関する教育情報を効率よく提供するためには、情報の発生源と提供先としての学校教育現場と、その加工やウェブサイトの内容化を行う大学との間に、小規模で柔軟な人的ネットワークを構築する必要がある。

今回の事例における卒業生とのネットワークは、教育現場からの資料を得るという点において有効に機能した。特に、へき地・少人数教育における様々な教育課題が、現場に勤務する卒業生にとっての現実的で具体的な課題となって明らかにされたことの意味は大きい。

提供した教育情報の有効性、ウェブサイトの内容の妥当性に関しては、現段階ではこれを確認する手段を講じておらず、今後の課題とされる。

注

- 1) 佐々木宰, 「道東の画工教育現場ではどのような教育情報が求められているか」, 『へき地教育研究』第59号, 2004年, pp.41～50.
- 2) 佐々木宰, 亀岡朗子, 「道東へき地校における造形教育教材開発」, 『へき地教育研究』第57号, 2002年, pp.103～108.
- 3) 北海道教育研究所附属情報処理センターウェブサイト: <http://www.ipec.hokkaido-c.ed.jp/>
北海道教育情報通信ネットワークウェブサイト: <http://www.hokkaido-c.ed.jp/>
- 4) 北海道理科教育センターウェブサイト: <http://www.ricen.hokkaido-c.ed.jp/>
道立特殊教育センターウェブサイト: <http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/>
- 5) 釧路教育研究センターウェブサイト: <http://www.kushiro.ed.jp/center>
- 6) 同上
- 7) 鎌田浩子, 佐々木宰 「へき地に学ぶ『総合的な学習』の教材開発の構想」, 『僻地教育研究』第56号, 2001年, pp.47～54.
- 8) 教育情報ナショナルセンターウェブサイト:

<http://www.nicer.go.jp> である。

- 9) IT 教育総合案内サイト：<http://www.open.ed.jp>
- 10) 西尾隆一，「Web こども美術館 一文部科学省委託教育情報共有化促進モデル事業」『教育美術』平成17年5月号，教育美術振興会，2005年，pp.38～41．
- 11) 山崎正明，「毎日が研究会？ ブログ等の活用」『教育美術』平成17年5月号，教育美術振興会，2005年，pp.42～45．
- 12) ウェブサイト ARTEDU@HUEK：<http://artedu.kus.hokkyodai.ac.jp>
- 13) 佐々木宰，亀岡朗子，「道東へき地校における造形教育教材開発」，『へき地教育研究』第57号，2002年，pp.103～108，の实践をウェブデータ化して紹介した。
- 14) 佐々木宰，「道立釧路芸術館との連携による大学授業の試み」，『北海道生涯学習研究』第6号，2006年，pp.109～118．



図1 ARTEDU@HUEK のホームページ



図2 「教材例・実践例」のトップページ

ARTS IN THE WORLD

粘土で

教師ミチコの図工教育 平成18年度の実践題材

■粘土で



板書。小規模校で1～5年生全員の図工なので学年別にめあてがある。作品名「動物の公園」:いろいろな動物がいます。



左「ふしぎなきよふ心のゆう園ち」。ネーゴランドの馬が本物になって逃げ出して…という世界。右「気もわるい生き物」。



左「ふしぎなきよふ心のゆう園ち」。ネーゴランドの馬が本物になって逃げ出して…という世界。右「気もわるい生き物」。

子どもたちは空想の世界に身を置きながら粘土で形作っているようだ。お話ししながらつく子どもたちの様子を見てると、ひよ〜に面白いとミチコは言う。そりゃそうだろうなあ。

子どもたちの作品をみると、おおむねみんな「作品が立っている」ようで、いいね。低学年から中学年にかけての粘土では、立体物として表現することを感覚的につかんでもらいたい。ともすると、粘土板を画用紙に見立てて、平面的な(レリーフのような)表現になることもあるようだ。しかし立体的な意識をつかませるかが、なかなか難しいという。子どものお話や、空想するもののイメージから、立体的な感覚をひきだしてあげたいものだ。

たとえば、「ふしぎなきよふ心のゆう園ち」をみてみると、ネーゴランドやコービーカップが登場する。絵で描くよりも、粘土で立体的に作った方が表現しやすい。ミチコの話によると、作った子どもが言っているように「ネーゴランドの馬が本物の馬になって、コービーカップをぐるぐるまわって、そんで向こうに行って来た…」というお話らしいが、絵ではなかなか表現できない空間的な動きのお話を表現するためには粘土はぴったりだ。

また、子どもが対象物についての視覚的・感覚的な直接体験をどれくらいしているかということも表現されるものに大きく影響するようだ。例えば、下の「はやいしんかんせん」は、周囲のいろいろな物を立体的(空間的に)配置されているのに、新幹線そのものは粘土でつくった輪郭線を立てたような格好だ。北海道には新幹線は走っていないので、多くの子どもは新幹線をテレビの映像しか見たことがない「しんかんせん」という物のイメージが平面的になっているのかもしれない。この千がもしも新幹線を直接みたり、乗ったりして「輪のあるもの」として感覚的にとらえる体験をすると、表現の仕方が変わってくるのではないだろうか…と思う。



もちろん、この子の名義のために発言しておくが、この表現がダメだと言っているのでは決してない。まったく新幹線を作るようになることが「正しいわけ」ではないのである。また、そういう風に作らせることが「正しい指導」と思われても困っちゃう。子どもの表現が生まれる背景には、モノコトについての体験とイメージがあるはずで、そこまでさかのぼって子どもの表現を見てあげたり、わかってあげたり、さらにそれをヒントにして指導を考えたりすることが大切だね、ということをお願いしたいだけ。

ミチコは、作っている最中に出てくる子どもの言葉が最も面白いという。そうだね。「はやいしんかんせん」とか「ふしぎなきよふ心のゆう園ち」とかを作っている人達が、話している言葉だからね！ さて、「気もわるい生き物」の作者によるコメントを以下に紹介しよう。「かみかみ」は追加のものと作りました。…「気もわるい」のは、パッパローみたいな顔とアリみたいな体とか、トンボの羽とかタヌキのシッポをつけた所が工夫した所です。」だって。うーん、なかなかやりますね。

<<BACK TO HOME

図3 小規模校での図工実践(粘土)

運動会応援旗

教師ミチコの図工教育 平成18年度の実践題材

■運動会応援旗



漁師さんから大漁旗を借りてきて、2階から眺めてみる。パソコンを使ってみんなデザインを考えてみよう。みんなパソコンは得意。



デザインをOHPで布に投影して線をなぞっていくところが、OHPのおもしろさに気がついて、カラー影絵遊びが始まっちゃった！

運動会でつかう応援の旗も、みんなで作ろう！ ということになった。漁業の町なので、本物の「大漁旗」を借りてきて並べて、まずは2階のロビーからみんなで見せてみる。それからパソコンを使ってデザインを考えて、OHPシートにプリントして、それを投影して大きな布にうつとしていく、という活動をしていたら、子どもたちがバリバリになっちゃったとか。ある子どもは、OHPの排気口に手を当てて「あつたか〜い〜」だって。あまったOHPシートに絵を描いて投影したら、カラー影絵になったので、子どもたちは大喜び！ 投影される絵の中で逆立ちしたり、絵の中のキャラになりきっちゃって遊ぶ子ども、新たな絵を描いて投影する子ども、OHPを操作して影絵遊びに熱中する子がいろいろと大騒ぎだったとか。

ミチコはこのときの様子があまりにおもしろかったので、デジカメで静止画と動画を記録してくれて、仕事が終わった後にワザワザ1時間半の道のりを運転して、大学まで見せに来てくれたのだった。確かに面白い。動画を見ると、子どもの反応がよくわかって、めちゃめちゃ面白いので、残念ながら、動画はこのホームページではお見せできません。

そうだよ、OHPってカラー影絵だもんね。40人の学級でやったら大変な騒ぎになってしまうだろうけど、上の写真のようにミチコの学校が「全校生徒」が白人ですから。楽しそうなのは楽しそうなのですが、図工は全学年一緒に勉強するので、題材を考えるミチコは「楽しい」といってもつものように授業を積み立てていく、授業の毎日なのであった。異学年での図工というテーマは、北海道のようなへき地・小規模校の多い地域ではとても重要なテーマなのです。

運動会の応援旗のその後は、情報が入り次第お伝えします。(取材を計画中)

[<<BACK TO HOME](#)

図4 小規模校での図工実践「運動会応援旗づくり」

ARTEDUCATION

9ちゃんの実践

■縄文の灯■

(これまでの流れ)学校の近所で土器が発見されている。大昔から、人は身の周りの材料を使い、工夫してものをつくり、生活に役立ててきた。自分たちの手の届くものづくりをさせたいと考えた9ちゃんは、学校の裏山から粘土層を探し当て、生徒たちと粘土を採取する。粘土や焼き物の知識・技術はほとんどない。それでもやればできると、の一念で授業を進めていく。粘土を練って、縄文時代の暮らしをイメージしながらランシェード(灯台)をつくり、今回はそれを野焼きで焼いてみた。野焼きの知識も経験もゼロ。人から焼いたり調べたりしてとあえずやってみる。なんてことしているうちに、研究授業当日に、研究授業は、函館の教育大学附属中学校で行われたため、この日のために生徒たちはバスで附属まで移動しての授業。生徒たちも9ちゃんもなじみのない教室で、たくさんのギャラリーに見つめられながらの授業となった……

いよいよ授業がはじまった。9ちゃんも生徒たちも緊張気味。全道大会とあって、多くの先方が授業参観に来て……



授業開始まえの緊張の面持ち。

先輩の花や同級生のリキもいる。

すごい数のギャラリーが……



掘った粘土を野焼きして作った土器に

ローソクを入れて火をともし

ローソクを加工して入れている図



電気を消す。「おっ！！」

薄暗くして先生の作品を見てみよう

雰囲気あるね～



これは「顔」か……

さ～、感想を聞いてみようね～

それじゃ発表してもらおうよ～



みんなそれぞれにいいところあるね～

今日がよくがんばったぞっ

生徒たちもやしやだ……

研究授業という特殊な状況であるにもかかわらず、たいへんよいムードの授業だった。感心したのは、9ちゃんの正直な授業の進め方と、それに素直に応じる子どもたちの姿だ。

じつは、9ちゃん、野焼きの焼き加減がよくなかったということも、直前に他の先生に指摘された。「そーか～、黒いのはまだ焼けてないのか～」と気づいたものの、どうにもできない。授業ではそのことを正面に生徒に告げていた。作品の完成度やかたち云々、いろいろあるだろうが、この授業では「粘土を実際に掘ってつくる」「それをじっさいに焼く」ということが最大の目的だ。そのことに生徒とともに真正面から取り組んだ9ちゃんの実践の意図は大きい。

研究授業は「鑑賞」がテーマだったが、ローソクに火をともした暗闇での鑑賞は、単に作品の外見を見るのではなく、これまでの全工程を見つめさせる機会になっていた。灯りを消して生徒たちが見ていたのは、粘土を掘ったり練ったりした場面、焼いた場面であったはず。

9ちゃん、それから生徒さんたち、ホントにご苦労様！

[縄文の灯 指導案\(PDF\)](#) [野焼きの資料\(PDF\)](#)

[<<BACK TO HOME](#)

図5 北海道造形教育研究大会での公開授業(平成17年,函館)

はまちゃんの教材

はまちゃんの教材は、卒業研究の成果。授業の導入部分や、フリップで使うWeb教材の制作に取り組んだ。完成した教材はCD-ROMにデータとして格納され、教材の内容・制作の方法・指導事例や授業教育への展開は、卒業論文にまとめられた。卒業論文のタイトルは、「中等教育向け鑑賞Web教材開発——事例ヒカゾー」というもの。

【はまちゃんの卒業より】

教材で扱う内容に関してはヒカゾーを事例とした。ヒカゾーの代表作4点を取り上げて、その作品にまつわるエピソードやヒカゾーの人生にまつわるエピソードを紹介する。また、それぞれの作品と同時期、同テーマの作品を紹介している。ヒカゾーに関するすべてを網羅する辞書のようなものではなく、ヒカゾーについて興味を持ち、ヒカゾーについて知るための導入となる教材を目指した。内容の構成については次のようになっている。

Introduction
1章 「人生」(1903)
2章 「アヴィニョンの娘たち」(1906-07)
3章 「ガルニカ」(1937)
4章 番外編 「泣く女」(1937)

はまちゃんの教材開始 >>START!



<<BACK TO HOME

図6 卒業研究で作成されたウェブ教材

情報とアイデア

●平成17年度 北海道教育大学附属釧路小学校・中学校教育研究会のようす 2005/11/07 >>GO>>

2005年11月4日、北海道教育大学附属釧路小学校と中学校で、研究大会が開かれました。昨年までは別々に開催されていたのですが、今年度は小学校と中学校の連携をテーマに、合同開催のまこととなりました。多くの研究授業と分科会が行われましたが、園工・美術に関しては、小学校のKENROU先生の授業、中学校のMASみ先生の授業が公開され、分科会では釧路及び十勝の園工・美術の先生たちの話し合いがもたれました。

●岡部昌生 ワークショップ シンクロ+シティプロジェクト2005のようす 2005/10/01 >>GO>>

2005年8月6日(土)、7日(日)、釧路市で岡部昌生先生のワークショップが行われました。岡部先生は、プロクターの技法で活躍する作家です。6日に釧路市春採の臨海鉄道で行われたワークショップの様子をお伝えしましょう。なお、このワークショップには、卒業生の轉ちゃん亀ちゃん、F高中のMASみ先生、高校のJUN先生、それから事務局として釧路市美術館の瀬戸さんたちが参加していました。

●北海道造形教育研究大会(函館大会)のようす 2005/08/09 >>GO>>

2005年7月28日(木)、北海道造形教育研究大会が函館市(附属中学校)で開催されました。北海道造形教育研究大会は、北海道各地の造形教育研究団体の全道大会。毎年北海道各地で開催されています。今年も函館市、友達がいるし、卒業生の9ちゃんが研究授業をするというので、ちょっと遠いけど行ってきました。

●10年経験者研修のようす 2005/08/04 >>GO>>

学校の先生になって10年(くらい?)になると、研修を受けなくてはならないのです。北海道教育大学は、北海道教育委員会の協力要請を受けて、学校の先生方の研修を担っています。釧路校では本年度(平成17年度)が初めてのどりくみです。美術では、「表現・鑑賞コース」という研修講座を開き、11人の先生方がこれに参加してくれました。熱心に研修にとりくむ先生方の姿を紹介しましょう。(教員先生、口長先生、教育口員の方々、見えますか! 参加した先生方は興に一生懸命研修にとりこんでますよ! 給料上げてください!!)

<<BACK TO HOME

図7 「情報とアイデア」のトップページ

ARTS FOR ALL

平成17年度 北海道教育大学附属釧路小学校・中学校教育研究会のようす

2005年11月4日、附属小中合同の研究大会が開かれました。例年だと、小・中別々に開催されているのですが、今年度は合同開催、小学校と中学校の連携を考えるという点。義務教育のあり方が再考されつつあるいま、大事なテーマですね。

図工や美術でいうと、小学校1年生から中学3年生までの9年間で、図工や美術って何をすればいい？っていうことを改めて考える機会になります。この9年間ってすごいです。幼稚園に近い人達から、高校生に近い人達までっていうことです。この年齢層の人達が、絵を描いたりものを作ったりするわけです。この9年間の学習で、こどもたち(後半はこどもって感じじゃなくなるよね)にどうなってほしいのか、考えなきゃね。というのがテーマでありました。

■附属釧路小学校 KENROW先生 図画工作 みてみておはなし(物語の絵)「ぐるんぱのようちえん」

KENROW先生の授業は、小学校1年生の表現活動。「ぐるんぱのようちえん」という絵本のお話からインスパイアされたイメージを育み、絵(コラージュ)にして表そうとするもの。お話を聞いて、子どもたちが聞いたいろいろなモノを切り取り、自分で描いた背景にはり付けていく学習が公開されました。授業が始まり、最初にKENROW先生がお話を聞かれます。子どもたちは録音機で聞いて、KENROW先生のお話をきいて、喜んで喜んで聞いて、もう大コーン。その後、自分の作ったパーツを、背景の画用紙にはり付けていきます。



図説するKENROW先生。最初に聞いたお話を、お話に乗換するモノを次々とはり付けて、イメージを形にしていこう……。



図説するKENROW先生。同時に聞いたお話を、お話に乗換するモノを次々とはり付けて、イメージを形にしていこう……。



子どもたちは思い思いに自分なりの物語をしていく……。授業の終わりでは、自分や友達のお話をよさを言葉にして表現していく。

●この授業の指導案(PDF) >>DOWNLOAD>>

■附属釧路中学校 MASみ先生 美術 印象派に挑戦！ ～らしさを見つけよう

MASみ先生の授業は、中学2年生の鑑賞の授業。印象派の作品を中心に、それまでの絵画作品との作風の違いを、「らしさ」として見つけていくのがねらい。今回は、永谷園のお茶漬けについてきたオマケカードのような、「鑑賞カルタ」を聞き、それを授業に導入してみました。生徒たちは、カルタの楽しみながら、絵画作品の豊かな作風を徐々に理解していきます。MASみ先生、3回も試行授業をしたがいあって、言葉も滑らか、生徒の反応も引き出しながら授業をすすめて行きます。前任者のNAL彦先生も駆けつけ、多くのキャーラーの見守る中、かなりいいかんじで授業は無事終了！おつかれさま！



さあさあ授業が始まるよ～、と思ったらカルタゲームから開始されるのだった。ほらほらこんな絵なんだよ～。生徒たちも好反応。



ゲームに興じる生徒たち。ワークシートに記入したり、絵の印象を言葉で表現したりしながら授業が進む。無事終了、安堵のMASみ先生。

●この授業の指導案(PDF) >>DOWNLOAD>>

■分科会

分科会には、釧路市内及び近郊の先生方、それに美術研究家の学生も参加した。こんかいは、小中合同開催なので、小学校の先生と中学校の先生が一緒に図工・美術のことについて意見交換や情報交換をする画期的な分科会だった。スバラシイ！話し合いは、研究授業がどうであったかということが中心になるのだが、その中で、小学校・中学校の先生それぞれの表現活動や鑑賞活動にたいする見方などの違いが互いにはっきりとわかってきた。小学校1年生の授業と中学校2年生の授業はかなりちがうけれど、義務教育段階でたまたま美術教育の役割がたまたま、子どもの表現ってものをどうやって見ていけばいいのかわかっていることのヒントが出てきたように思います。

面白かったのは、中学・高校の先生が、小学校1年生の授業をみた感想。ふだん見慣れたものをみて、かなりのカルチャーショックを受けたようだ。美術研究家学生のKIM君も昔は面白い小学生の姿をみて、考えるところがあったみたい。次のような感想を述べています。
「小学生の授業を見るのは、自分が小学生だったとき以来だったのですごい衝撃でした。特に、黒板に絵を描いて子どもたちがいるのは……。あれが普通なのかなと……。自分は教師になるなら高校の美術教師になりたいと思っていましたが、小学校や中学校の授業をみたり、実習をするうちに、自分もむしろ小学校や中学校の方が、楽しんでもらえるんじゃないかと思うくらい。すごくいろんな事を学んで、自分の中の考えをまえることができました。KENROW先生の授業の資料(子どもたちの制作風景)などを見て、すごくうらやましいなと思いました……。MASみ先生の授業については、これまで3回も見ていたのですが、さすが3回やっただけのことはあるなと……」
(X注 KIM君はつい先日まで附属中学校の教育実習でMASみ先生にお世話になっていたのだった。KIM君は夏休みに出身高校で3週間の実習を行い、その後附属でこの1週間分の教育実習をしていた。)

小・中・それに高校も含めて、美術に関わる教育を考えた、たいへん貴重な分科会でした。司会のかほE先生、お疲れ様でした！



分科会はこんな感じ。KENROW、MASみ、NAL彦先生。知っている先生も一杯います。U君も来ています。左がKIM君。

<<BACK TO HOME

図8 附属釧路小・中学校研究大会の記録

資料

図工や美術教育に関する資料を紹介します。美術教育研究室の学生や卒業生、たのしい知見などの力をかりて、いろいろな資料を載せたいと考えています。管理人の資料も載せるので、役に立つかどうか不明のものもあります。

●[図工・美術実践のためのTIPS](#) new! [>>GO>>](#)

図工・美術実践のヒントなどを集めています。現場からの声をもとに掲載した情報、管理人が勝手にヒントになるだろうと考えた情報、それから管理人が授業で使った(使っている)プリントなどの一部を掲載しています。

●[卒業論文発表会のレジュメ](#) [>>GO>>](#)

平成17年度の卒業論文発表会ときのレジュメです。平成17年度は3人が、それぞれのテーマのもとに卒業研究を行いました。

●[指導案など](#) [>>GO>>](#)

図工・美術の指導案のひな形(ワード形式)、研究授業の指導案などを掲載しています。いまのところ、美術教育研究室の学生が、教育実習中などに利用したり参照したりすることを想定しています。いろいろな先生が実践した指導案などが手に入ったら、もっと拡大していくつもり。

●[大学生の鉛筆削り](#) interesting! [>>GO>>](#)

最近の子どもはナイフで鉛筆を削れない…なんて最近の大学生が言っているけど、それじゃ、最近の大学生はどれくらい上手に鉛筆を削ることができるでしょうか？ 管理人の授業で大学生に削ってもらった結果を公開しましょう。

●[小学校図画工作の材料と技法](#) [>>GO>>](#)

平成17年3月に卒業した美術研究室の学生たちが、授業の課題として制作したもの。小学校図画工作で使われるであろう道具や材料の詳細情報をまとめたもの。紙、絵の具、クレヨン、はさみ等々、図工に出てくる材料・用具を言葉と図で解説。学生たちが頑張ったまとめの力作。超お勧め。

●[管理人が書いたものなど](#) up! [>>GO>>](#)

管理人がこれまで書いてきたものうち、いくらマシなもの(ホントか?)を、PDFファイルにしてみました。

[<<BACK TO HOME](#)

図9 「資料」のトップページ

図工・美術実践のためのTIPS

●[図工・美術で使う紙](#) [>>GO>>](#)

札幌で仕事をしていたら、携帯がなった。出てみると、なんと、10年経った研修を受講してくれた先生からでした。「私のこと覚えてますか〜?」とか言うので、「覚えてますよ!」大学に来る途中で道に迷って迷った先生です(笑)〜!」てな感じで、お話しする。さて、用件は質問でした。10年研修で教った紙工作の教材、学校でもやってみようとしたけれど、あのとき使ったケント紙の「厚さ」って、どういう風に指定して注文するものか、ということだった。ナルホドね。紙の厚さ(重さ)ってわかりにくいもんね。と言うことで、「紙」についてのマメ知識を紹介。

■[紙版画道具セット](#) [>>GO>>](#)

小専図工という大学の授業があります。小学校教員免許のための授業で、図工の実技と指導について扱います。いつも、紙版画の内容を含めています。多くて50~60人の学生が受講するこの授業の教壇に持っていき紙版画の道具を紹介します。研究室から離れた教室まで持っていくために、軽量化したセットを作りました。

■[小専図工用プリント](#) [>>GO>>](#)

小学校教員免許の図工の授業「小専図工」で管理人が使用したプリントです。かなり時間と努力をかけてプリントを作っています。徐々に増やして、将来的には本になればいいな〜か思っていますが、いつになるかわかりません。PDFとしてあります。

[<<BACK TO HOME](#)

図10 「図工・美術実践のためのTIPS」のトップページ

ART&DESIGN

紙版画道具セット

紙版画は、低学年の児童でも版画を楽しむ題材としてひろく普及しています。木版画などと違い、彫刻刀などの技術を要する道具を使わなくてもできます。また、下絵-転写-版づくりといったプロセスを経なくても、切り取った形を貼り付けて絵にする感覚で版をつくることができます。

ここでは、「刷り」の道具のセットを紹介します。ワタシが、大学の授業で実際に使用している物です。最大60人規模の回工の授業(主に実技体験から指導を考える演習の授業)は、一般教室で行われます。なので研究室から教室まで道具を運ぶなくてはなりません。このセットは軽量化で安価、さらに水洗いもできて便利です。6つの刷り場をつくるための道具が入っているので、60人の受講生でも1つの刷り場につき10人となり、なんとか対応できるのです。

	<p>＜紙版画道具セットの内容＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケース (ホームセンターで買ったプラスチックの衣装ケース) ・刷り台 6枚 (100円ショップで買ったプラスチックのトレー) ・ゴムローラー 6個 (教材カタログ) ・ローラー台 (ラワン材で自作) ・刷り台 6枚 (もらい物のアクリル板) ・べら 6枚 (もらい物のアクリル板) ・版画用紙 新島の子 八つ切り 100枚入り 1袋 ・ばれん 6個 ・新聞紙 ・ゴム手袋 ・種ティッシュ ・マスキングテープ ・こまかく切ったウエス
	<p>●ローラー台に収めたゴムローラー</p> <p>ゴムローラーは、教材カタログで安い物を選んで購入しました。ローラー台付のセット品は、いきなり値段が高くなってしまいました。ホームセンターでラワン材を少しだけ買って、それで台を作りました(ありゃ、写真をみたら木杢にホームセンターのシールがついてました)。</p> <p>ローラー6個を収めることができます。とってつきの台などにすると材料が余計に要るので、超シンプルでよいのです。その辺にあったトレイにのせて、トレイに安い物でニール袋に入れて、ケースにしまうことができます。</p> <p>ローラーの後ろにちらりと見える緑と黄色の物は、アクリル板の裏で作った(というか余りのまま)へらです。インクべらにも使えるし、その他いろいろ使えて超便利です。</p>
	<p>●刷り台(台といよりも版)</p> <p>刷り台(台)は、刷りの下敷き用の板です。もらい物のアクリル板を切って作りました。版画用紙の六つ切りよりもちょっと大きめのサイズになっています。</p> <p>まず、アクリル板の上に刷る板(版画用紙)をのせ、板の四辺に沿ってマスキングテープを貼ります。こうすると、マスキングテープが「見当」になります。つまり、マスキングテープで囲まれた面が、ちょうど刷る板のサイズと同じになるので、インクを付けた版を置くときの目安になるわけです。例えば、四角い版をのせるときには、だいたい真ん中になるように、四方のマージンを目で確かめながら版を置くことができます。</p> <p>作業が全部終わったら、マスキングテープをはがして、水で洗えばキレイになります。なお、インクは水溶性のインクを使うことを前提にしています。</p> <p>学用品の下敷き程度の厚さなので、絵ボールに挟んでからニール袋に入れてケースに収納します。</p>
	<p>●インクの刷り台</p> <p>インクの刷り台は、100円ショップで買ったプラスチックのトレーです。はじめはステンレス製のパッドにしようと思ったのですが、とても高価でした。油性のインクを扱うのならステンレスが良いのですが、「インクは水性しか使わない」と刷り切ってしまうは、プラスチックのトレーで充分まにあいます。</p> <p>最近の水性インクはともかくできていて、インクの練りに労力を要しません。トレイにインクをのせて、ローラーでコロコロするだけでOKです。</p> <p>使い終わったら、残ったインクを新聞紙などで拭き取ってから、洗剤をつけて水洗いするとキレイになります。水気を拭き取って、トレイを6枚重ねてニール袋に入れてケースに収納します。トレイは重ねてしまえるタイプの物(ほとんどの物はそうすがら)だと、コンパクトに収納できて便利です。</p>
	<p>●小道具入れ</p> <p>小道具入れ(100円ショップで買ったケース)の中には、ばれん、マスキングテープ、小さく切ったウエス、はさみなどを入れておきます。</p> <p>ばれんは刷りに必ず使うものなので、予備も含めてまとめてケースに入れておきます。マスキングテープは、刷り台に見当をつけるために必要です。洗うときにはがすので、マスキングテープが良いです。</p> <p>さて、ウエスはとても大切なアイテムです。教材カタログで買うと、20cm四方の絵ボール程に、粗く割いた古シャツの布がぎっしり入っています。1800円くらいするので、「水口布をお金出して買うなんて・・・」という気になります。すごく重宝します。入っている物は、種付のサイズですが、それを半分の半分の半分の半分くらいにします。小さい方が、種付が汚れを取るときに便利です。小さく切ったウエスを添えて刷り台のそばに置いておくと、刷り終わって台を拭くときに便利です。</p>

<<BACK TO HOME

図11 紙版画道具セットの紹介

指導案など

指導案作成のためのひな形や、過去の指導案をダウンロードすることができます。

書 類	学 年	実施	形 式	備 考
美術科学習指導案(書き込み用のひな形)			MS-WORD	書き込み用のひな形です。
風文の灯(やまもの)	中2	2005	PDF	2005全道造形画展大会 公開授業
風文の灯の関連資料(野地ま実践)	中2	2005	PDF	2005全道造形画展大会 公開受講
油彩画「静物「流木」	高2	2005/09/14	PDF	2005・04・77年度 教育実習の研究授業
色の広がり・色の魅力	中1	2005/09/16	PDF	2005・04・77年度 教育実習の研究授業
大迫いっさんとかん。(国語)	小5	2005/09/28	PDF	2005・04・77年度 教育実習の研究授業
みてみておぼえなし「ぐるんぼのようちえん」(物語の絵)	小1	2005/11/07	PDF	2005・04・77年度 附属訓練小中学校教育研究会 研究授業
印象派に挑戦! ～らしさを見つけよう(版画)	中2	2005/11/07	PDF	2005・04・77年度 附属訓練小中学校教育研究会 研究授業

[<<BACK TO HOME](#)

図12 公開している指導案